

能登・やわらぎの郷 聖徳太子殿天井画 修復記念

孤高の画家

## 田中一村展

7月28日(土)～8月26日(日) 会期中無休

— 尊經閣文庫にみる —

■ 平清盛とその時代

【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 古九谷の美とその流れ

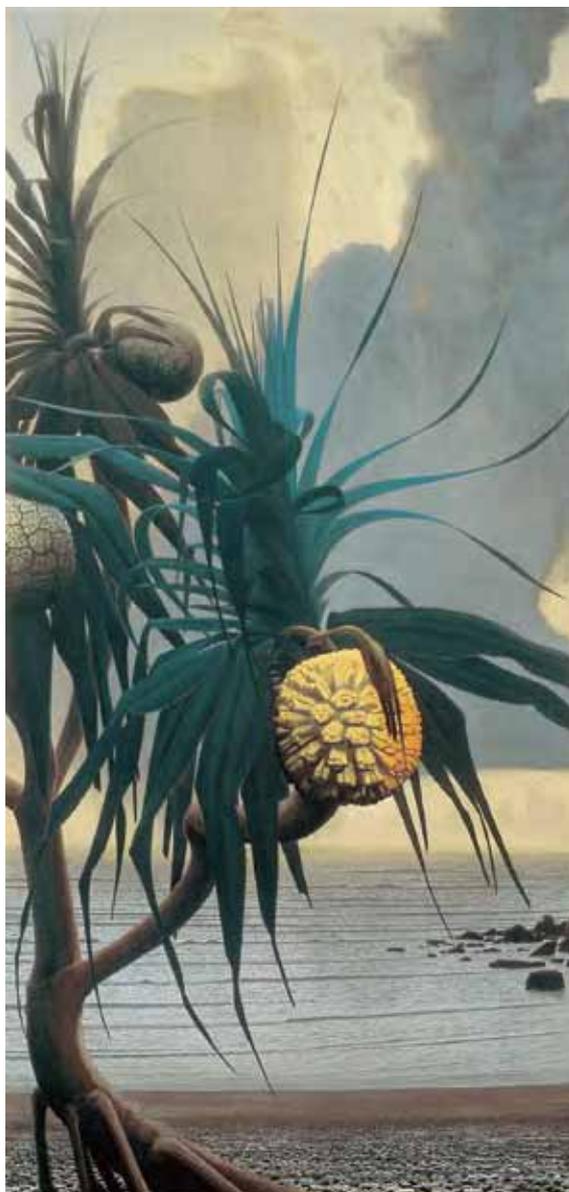
【第2展示室】

夏休み 親子で楽しむ美術館

■ きこえてくるよ

【第6展示室】

7月19日(木)～8月28日(火) 会期中無休



「アダンの海辺」昭和44年 「孤高の画家 田中一村展」より  
©2012 Hiroshi Niiyama



板谷光治 沈金素彫群漆箱  
夏休み親子で楽しむ美術館「きこえてくるよ」より

- コレクション展示 今月のみどころ
- 企画展Topics 須田国太郎展
- バスツアー報告
- 情報・図書コーナーより
- ミュージアムショップ通信

# 孤高の画家 田中一村展

主催／北陸中日新聞、石川県立美術館、石川テレビ  
 協力／田中一村記念美術館、千葉市美術館、NHK出版  
 後援／石川県、金沢市、金沢市教育委員会、宝達志水町、エフエム石川

7月28日(土)～8月26日(日) 会期中無休

## 入場料

前売り・団体	九〇〇円	一般	高・大生	小・中生
当日	一、一〇〇円	七〇〇円	五〇〇円	三〇〇円

団体は二〇名以上

## 関連行事

田中一村記念美術館館長 宮崎緑氏特別講演  
 八月九日(木) 十三時三十分～十四時 美術館ホール  
 ※聴講には本展の入場券が必要です。

画壇の表舞台に立つことなく、単身渡った奄美大島で孤高の生涯を貫いた日本画家、田中一村(明治四十一―昭和五十二)。幼少より書画に親しみ、その卓抜した技量で神童と謳われながら、画壇において日の目を見ることはありませんでした。昭和三十三年五十歳で奄美に渡った一村は、数年働き資金を貯え、その後制作に専念するという生活を繰り返します。そして自らが「閻魔王への土産物」と称した「アダンの海辺」、「不喰芋と蘇鐵」などの傑作を残し、六十九歳でこの世を去ったのです。一人で夕食の支度をしている最中に倒れるという寂しい最後でした。

無名の画家田中一村が注目を浴びるようになったのは、昭和五十九年放映のNHK日曜美術館「黒潮の画譜」異端の画家 田中一村からでした。濃密な色彩で亜熱帯の自然を描いた作品群と、画業に全てをかけた生きざまはブームを巻き起こしました。次々と画集、評伝が刊行され、日本各地で展覧会が開催。平成十三年には鹿児島県奄美パーク田中一村記念美術館の開館をみたのです。その田中一村が昭和二十九年から三十年にかけて、宝達志水町にある、やわらぎの郷聖徳太子殿天井画制作のため来県し、四十九枚の天井画の制作の他、陶磁器の絵付けなども行っていることはあまり知られていません。傷みが激しかった天井画は、今春石川県文化財修復工房で修復が完了し、修復後初公開となります。

本展では四十九枚の天井画をはじめ、東京時代、千葉時代、そして一村芸術の精華ともいえる奄美時代の代表作など、約九十点の展示を通し、孤高の画家田中一村の「美」の軌跡を紹介します。

## 主な展示

- 「白い花」昭和二十二年、
- 「薬草図天井画」昭和三十年、
- 「アダンの海辺」昭和四十四年、
- 「不喰芋と蘇鐵」昭和四十年代



「初夏の海と赤鸚翠」昭和37年(1962)  
 田中一村記念美術館蔵  
 ©2012 Hiroshi Niiyama



「薬草図天井画」(部分)昭和30年(1955)  
 やわらぎの郷聖徳太子殿蔵  
 ©2012 Hiroshi Niiyama



「不喰芋と蘇鐵」個人蔵  
 (田中一村記念美術館寄託)  
 ©2012 Hiroshi Niiyama

古九谷の美と  
その流れ

7月19日(木)～8月28日(火) 会期中無休

古九谷の美を語る時、同一意匠のものが全くといってよいほど存在しない事実を忘れることはできません。かつて、石川県立美術館が所蔵する「色絵鳳凰図平鉢」（石川県指定文化財）と同一意匠とされる作品が話題となりましたが、この両者を丹念に比較すると、構図や色の使い方に類似点はありませんが、絵画的描写の完成度に大きな隔たりがあることが注目されます。

石川県立美術館の「色絵鳳凰図平鉢」についてしばしば言われることは、鳳凰という伝説上の鳥を、あたかも身近で観察したような迫真の描写力が発揮されているということです。前号の「石川県立美術館だより」の所蔵品紹介にも書きました

ように、古九谷の絵付けは、一般的な陶画工ではなく「本画」を描く画家が行っています。そこに画一性を許さない、厳しい創作姿勢が貫かれています。

こうした芸術的価値の追求が古九谷の真価であり、それゆえに古九谷は大量生産と大量消費が循環する産業としては成立しませんでした。古九谷廃絶後、加賀の地において色絵磁器生産が次々と試みられていますが、その流れの根底には「美の高さ」への眼差しがあることを、今回古九谷二十五点と再興九谷一点の展示によって再認識していただければ幸いです。



石川県指定文化財  
色絵鳳凰図平鉢 古九谷  
江戸17世紀

— 尊經閣文庫にみる —  
平清盛とその時代

7月19日(木)～8月28日(火) 会期中無休

前田育徳会の「尊經閣文庫」を紹介する展示です。概要は前号で紹介しましたので、はじめて展示する重文「仏舎利奉納願文」（九条兼実筆）を紹介します。

治承四年（一一八〇）十二月、平清盛は、平氏政権に反抗的な態度を取り続ける東大寺や興福寺などの寺社勢力に属する大衆（だいしゅ）の討伐を目的に、子の重衡を総大将とした平氏軍を派遣し、激しい合戦の末、南都を焼き尽くして、東大寺も大半が焼失し、大仏（盧舎那仏）の首が落ちてしまっています。寿永二年（一一八三）五月十九日付けのこの願文は、東大寺再興のために、この前日に仏頭の鑄造が完成した大仏の胎内に、仏舎利を納めようという内容です。金銀の切箔や砂子、野毛を散らした豪華な料紙に、願主の九条兼実自らが、父藤原忠通の法性寺流を踏まえた力強く重厚な書風をみせており、数少ない兼実の遺墨としても貴重な作品です。

そのほか、下記のように国宝や重文を含む作品を展示しますので、展示期間に留意の上、ご鑑賞ください。

## 【主な出品作品】

重文 仏舎利奉納願文 九条兼実筆

展示期間は七月十九日～八月一日

国宝 広田社二十九番歌合下巻 藤原俊成筆

展示期間は八月二日～八月十四日

楼閣山水蒔絵歌書箱（国宝・広田社二十九番歌合箱）

展示期間は八月二日～八月十四日

重文 法曹類林 信西編著

展示期間は八月十五日～八月二十八日

平家物語（三条西本）

平家物語（長門本系統）

平家物語（康豊本）

平家物語（熱田本系統）

平家物語 古活字本

源平盛衰記 古活字本

保元物語 古活字本

待賢門合戦図屏風

平治物語

伝積善院尊雅筆

伝積善院尊雅筆

## きこえてくるよ

7月19日(木)～8月28日(火) 会期中無休

## 学芸員の眼

前号の「学芸員の眼」でご紹介しましたように、「きこえてくるよ」の展示は学校出前講座で行っているアートゲームの一つの活動を取り上げた展示です。アートゲームは自然に作品に親しむことができ、たくさんの方に体験していただきたい活動です。県立美術館のキッズプログラムでは、一昨年の秋に二階展示室を使って「アートゲーム大作戦」と称して小学生親子の方々に体験していただき、ご参加の方々から「楽しかった」「もっとやってみたい」との声を多数頂きました。そこで、この夏も「きこえてくるよ」の展示室をはじめ、二階展示室を使って小学生親子を対象に「アートゲーム大作戦2」を行う予定です。申し込みの必要はなく、八月五日(日)十三時三〇分までに、二階受付に集合いただければどなたでもご参加頂けます。多数のご参加をお待ちしています。

「夏休み親子で楽しむ美術館―きこえてくるよ」の展示室は、三つのコーナーに分かれています。今回は、その三つのコーナーについてご紹介しましょう。

まず、一つ目は「どんな音がきこえてくるかな？」のコーナー。何気なく過ごしている日々の中でも、私たちはいろいろな音に囲まれていることに気づいて頂くことができる「きこえてくるよ」の導入です。日本は四季の変化に富み季節が移るごとに、いろいろな自然の音を聞くことができます。例えば雨、雷鳴、滝、風などの自然の音。また、鳥のさえずりや動物たちの鳴き声などの鳥獣の声、そして虫の声からは季節を感じることもできるでしょう。そんな音探しをしていると、私たちはこんなに音に包まれて生活していることを再認識できることでしよう。そしてこのコーナーの中では、生活の音なるものも取り上げ、物売りの声、街中での車や足音、人の会話も感じていただきたいと思います。

す。

二つ目のコーナーは、「どんな場面かな？」セリフを考えてみよう。人物を取り上げた作品で深く鑑賞する方法の一つは、自分作品の中の人物になってみることです。ここでは、自分が作品の中の人物になって「どんなことを言っているか」セリフを考えてみます。実は、このコーナーで展示されている作品は、人物ばかりではありません。人間ではないものにもなってみてセリフを考える楽しい機会もお楽しみください。

最後のコーナーは「どんな感じがするかな？」音であらわしてみよう。何を表現しているのだろうとを考えてしまう抽象的な作品が集まっています。このコーナーでは、作品を音で表現してみることには挑戦です。作品から感じた印象を擬態語などであらわしてみるのはいかがでしょうか。難しく考えずにあなたの感性で気軽にあらわしてみてください。



久世建二 「落下」



薦 健三 「朝市=3人」

# コレクション展示 今月のみどころ

7月19日(木)～8月28日(火) 会期中無休

## 【日本画、油彩・アクリル】第三展示室

夏本番を迎えて、日本画は季節感ある作品を展示します。平桜和正「静映」は初夏の公園を、平木孝志「遊」は水中の海女を描いた清涼感を感じる作品です。こちらの作品で気持ちを落ち着かせ涼んでみるのも一興です。また反対に西山英雄の代表作、灼熱の「火焰山」や、二人の男女を描いた稲元実「夏日」を真夏に鑑賞してみるのもよいのではないのでしょうか。



稲元 実「夏日」

油彩・アクリル部門では、人物や風景画の中から、物語性の強い作品を中心に展示します。

鴨居玲の「石の花」「1982年私」「酔って候」、庄田常章の「ゾフNo.2」は、描かれた人々のつぶやきや、うめきが画面に渦巻いています。重く苦しい魂の叫びです。一方、脇田和の「連理」は比翼の鳥と連理草がたおやかに愛を語り合い、立見榮男の「雷神」は野に棲む主達の楽しげな姿



鴨居 玲「酔って候」

わめきを聞かせています。風景画では、池田良則の「庭園」、三浦泉の「残された刻」が、乾いた風の音を聞かせ、現代文明への警告を響かせています。様々な声をお聞きいただければと思います。

## 【彫刻、版画】第四展示室

石川県の戦前の彫刻は本県出身の官展系作家の活躍を中心に、オーソドックスな制作志向が窺えるものでした。しかし、戦後は金沢美術工芸専門学校（現、金沢美術工芸大学）の創立に伴い、時代の変化にも対応した多角的で多様な彫刻制作が展開することとなり、伝統の上に新たな時代の傾向を含んだ作品も見られ、北陸地区における拠点の一つになっているものと言えましよう。



長谷川八十「軍鶏」

各種展覧会で活躍した作家の代表作を中心に展示するもので、それぞれ個性的な作品の展開をご鑑賞いただくものです。

また、第四展示室では近現代の版画も展示します。宮本三郎「舞妓十二題」のうち「虫籠」など季節感ある優品を展示しますのでお楽しみ下さい。

## 【近現代工芸】第五展示室

今回の近現代工芸部門の展示では、陶磁二十五点、漆工十一一点、染織五点、金工三点、木工二点、人形一点、截金一点の計四十八点を展示しています。作品はそれぞれ、材質や技法、表現などバラエティーに富み、作者のすぐれた技量をうかがうことができます。

そのうち人間国宝の前大峰作「沈金猫文『けはひ』飾篭」は、楕円形の箱の蓋表に、何かの気配を感じた猫の一瞬の動きを、沈金の高度な技によって見事に表現しています。一方、前大峰のもとで修業を積んだ板谷光治の「沈金素彫猫文漆箱」は、師の作品とよく似た姿を示していますが、猫を真正面からとらえ、素彫りによって銀のような輝きを呈し、目と鼻の部分に金を用いて、独自の味わいを見せています。師弟の表現の対比の妙を、是非ご覧ください。



沈金素彫猫文漆箱／板谷光治作



沈金猫文「けはひ」飾篭／前 大峰作

# 須田国太郎展 — 没後50年に顧みる —

会期 9月1日(土)～10月14日(日) 会期中無休

主催／石川県立美術館、日本経済新聞社 特別協力／京都国立近代美術館

動物は須田国太郎の主要テーマで、豹や鷲などの猛獣猛禽類から牛や馬などの家畜、そして駝鳥、鴨、海亀、犬、猫、小鳥など実に多岐にわたって描いています。洋画というジャンルにおいて須田ほど動物を描いた画家は見あたりません。「人物」、「風景」、「静物」、この洋画の三大テーマは、須田の場合、「人物」に替えて「動物」とすべきでしょう。

また花瓶に活けた花であれば「静物」ですが、地に根ざして咲いているバラや牡丹、そして何げない野草を数多く描きましたので、この場合は東洋・日本画の「花卉図」といべきでしょう。つまり須田の画業は花卉禽獸を中心に展開していったのです。

明暗対比の強いバロック絵画を学んだ須田の作品は、油絵具本来のねっとりとした艶を持っています。そして、描く、削る、こする、こうした行為を繰り返して生まれた作品は、下地の白がすすれた線や点となって現れるなど複雑な絵肌を持ち、見る者の想像をかき立てます。研究と実作が須田の場合、高次のレベルで合致しています。

さて、須田は昭和十四年に京都市動物園とは目と鼻の先の左京区南禅寺草川町に移りました。須田の日記には足繁く園に通い、様々な動物を写生し制作する姿がうかがえます。代表作「犬」や「鶴」など、この動物園なくしては生まれなかったでしょう。興味深いエピソードが残っています。

動物園を愛した須田は二十八年九月に園内の標識画がまずいと、製作を買って出、すべて描き改めたのでした。しかし、残念なことにこれらの標識画は傷んで失われ、現在見ることはできません。まったく、惜しいことです。



真名鶴 1953年

## 第十回 バスツアー報告

五月二十七日(日)、天候に恵まれた一日に第十回美術館バスツアーを行いました。今回は「南砺・砺波の美術館・文化財を訪ねて」と題し、お隣富山県へ行ってきました。

午前中は南砺市に残る棟方志功の作品やその足跡を辿りました。最初に訪れた南砺市立福光美術館では、企画展「雪梁舎美術館コレクション 棟方志功展—ムナカタの魂に魅せられて—」と常設展を、学芸員の方の丁寧な解説により鑑賞しました。じっくりと棟方芸術に触れたところで、次は光徳寺へ向かいました。本堂で説明を受け、棟方志功や民藝運動の作家の作品を拝見しましたが、寺院内に並ぶ世界の民芸品も興味深いものでした。その後、棟方志功記念館愛染苑へ行き、棟方志功住居を移築した鯉雨画齋にて解説を頂き、棟方の南砺市での生活を垣間見ることができました。

昼食後、バスは井波へと進み、瑞泉寺に参りました。寺院内を案内して頂きながらの拝観、狩野探幽「山水図」など寺宝の特別公開もあり、瑞泉寺の歴史文化を知る貴重な機会となりました。最後に砺波市美術館を訪れ、開催中の企画展「梅原龍三郎 花と名峰」を担当学芸員の詳しい解説で鑑賞しました。鮮やかな色彩に目を奪われつつ、ツアーの全行程が終了となりました。

全体に足早での行程となり申し訳ない思いで一杯ですが、無事にツアーを終えることができたのも参加者の皆様のご協力によるものと感謝いたしております。この場をお借りしてお礼申し上げます。



瑞泉寺山門にて

# 情報・図書コーナーより

今日、書籍の販売も、従来の著者↓出版社↓取次↓小売店(書店)↓読者といった一般的な流通方式が、インターネットの普及などにより、大きく変化してきました。一方、美術館や博物館で開催される展覧会の図録などの販売は、それらの流通方式とは異なり、基本的に来館者が直接、展覧会場で購入する場合が主で、会期後も残部があれば販売するという形が、今日でも主流であるといえます。しかし近年、出版社とタイアップして図録を刊行し、一般ルートでも購入できるものも見られるようになり、さらには大規模な展覧会の開催に合わせて関連書籍を刊行して宣伝し、入場者の増加、図録の販売の促進と連動させるようなケースもうかがえるようになってきました。

当館には他館から、資料交換の形で毎年約三〇〇冊の展覧会図録が送られてきます。それらは、最新の情報をまとめた調査研究の貴重な資料であるとともに、それぞれのテーマに沿って掲載されている豊富な図版は、眺めているだけでも楽しめるものです。こうした当館の蔵書については、一般の方にも閲覧いただけるよう、順次整理して保管しており、館内の来館者システムで検索可能ですので、どうぞご利用下さい。

ちなみに一階の情報・図書コーナーでは、最近収蔵した、左記の図録を開架しますので、お気軽にお立ち寄り下さい。

## 記

○知識も理屈もなく、私はただ見てゐる

川端康成・東山魁夷コレクション展

平成二十三年／川端香男里

○モーリス・ドニ いのちの輝き、子どものいる風景

平成二十三年／NHK

○明治・大正時代の日本陶芸 産業と工芸美術

平成二十四年／同展実行委員会

※同展には、当館の所蔵品が三点、出品されています。

○菊畑茂久馬 戦後／絵画

平成二十三年／grambooks

○神々への祈り 神の若がいりとこころの再生

平成二十四年／東北歴史博物館

○ぬぐ絵画 日本のヌード 一八八〇―一九四五

平成二十三年／東京国立近代美術館

※開室時間は、午後一時～五時。貸出し、コピーサービスは行っておりません。

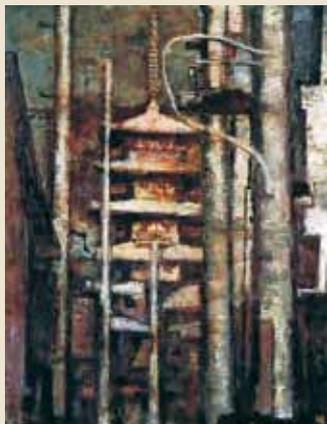
## 八月の行事予定

■キッズプログラム鑑賞講座 午後1時30分～ 2F展示室 参加無料	8月5日(日) アートゲーム大作戦2
--------------------------------------	-----------------------

## 次回の展覧会

会期：九月一日(土)～十月十四日(日)	企画展示室	須田国太郎展―没後50年に顧みる―
会期：九月一日(土)～十月二十一日(日)	尊経閣文庫分館	尊経閣文庫名品展―職人歌合わせの世界―
第2展示室		秋の優品選―琳派を中心に―
第3展示室		知られざる鴨居玲

企画展Topics 須田国太郎展 — 没後50年に顧みる —



法観寺塔婆 1932年  
東京国立近代美術館蔵



発掘 1930年  
京都大学人文科学研究所蔵



走鳥 1953年  
京都市立芸術大学資料館蔵



犬 1950年  
東京国立近代美術館蔵



鶏 1952年  
東京国立近代美術館蔵



窪八幡 1955年  
東京国立近代美術館蔵

本誌「企画展Topics」でも紹介した、秋の企画展「須田国太郎展— 没後50年に顧みる —」の図録が現在販売中です。この展覧会は、神奈川県立美術館葉山を皮切りに、約一年をかけて全国六会場を巡回する大規模展です。当館にも代表作がほぼ揃いますが、会場ごとに作品の入れ替えがあります。図録には入れ替え作品も全て掲載されています。開催各館からの須田国太郎に関する論考も充実したものになっています。この夏、図録を読み込んで秋の展覧会に備えてみてはいかがでしょうか。



「須田国太郎展 図録」定価1,000円

ミュージアムショップ通信  
先行販売「須田国太郎展 図録」

ご利用案内

コレクション展観覧料  
一般 350円 (280円)  
大学生 280円 (220円)  
高校生以下 無料  
※( )内は団体料金  
毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日 (8月は6日)

8月の開館時間  
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間  
午前10:00～午後7:00

8月の休館日は  
29日(水)～31日(金)



明治10年8月、加賀藩 前田家の出資により創業。

金沢支店 〒920-8686 金沢市南町5-28 TEL.076-263-5131

www.hokugin.co.jp

お客様の「うれしい」を、私たちの「うれしい」に。北陸銀行

広告

石川県立美術館だより  
第346号 (毎月発行)  
2012年8月1日発行  
〒920-0963  
金沢市出羽町2番1号  
Tel:076(231)7580  
Fax:076(224)9550  
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/